対談企画

小泉俊博 小諸市長

プロスノーボーダー 林業家（DLC代表） 天野紗智

DIVERSE LINES CLUB

今年の8月より、乙女湖公園「野鳥の森エリア」にて自伐型林業による持続可能な森づくりがはじまっています。そのプロジェクトを担うのは、「一般社団法人ディバースライン」。〈CREW〉（クルー）の皆さんは、自然を自らの手で守りたいという思いで環境保全に取り組みながら、アスリートたちの新たなライフスタイルの構築に挑戦しています。代表の天野さんにお話を伺いました。

プロスノーボーダーとして「小諸」へ

市長 天野さんと初めてお会いしたのは、まちタネひろばで開催されていたマルシェでワークショップをされていたときですね。プロスノーボーダーとして活躍されている方が小諸に移住されていることに驚いたのを覚えています。経歴と小諸へ来られた理由を教えてください。

天野 私は雪国・秋田県出身なのですが、スノーボードの大会に出場したり、雪山での撮影をしたりするなかで、より活動のしやすい長野県に移住してきました。練習では白馬や妙高などへ行くことが多いです。

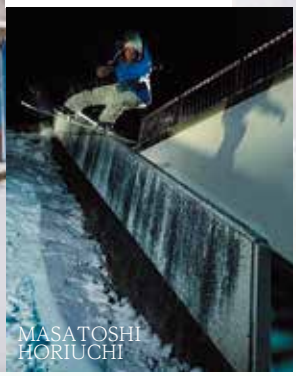
どのアスリートもそうですが、オフシーズンにはアルバイトなどをして冬の活動資金を貯める必要があるんです。そのなかで、東京や軽井沢のような観光地が近い小諸を選びました。

市長 プロスノーボーダーとして、今はどのような活動をされているのですか？

天野 プロにも色々な活動ジャンルがあります。私やディバースラインのメンバーは、競技ではなく、「自分達の滑りを撮影してもらい、その映像がスポンサー広告に使用される」といったプロ活動が多いです。

「天野紗智」として、自然のなかで他のひとができないような滑り、かっこいい滑りをしていくことで、スポンサーが評価をしてくださり、広告塔として使っていただいています。

表現者・林業家としての「DIVERSE LINES CLUB」の皆さんの姿は、こちら↓



百年後を想像しながら持続可能な森づくりを

写真提供：keen

「長く、少しずつ」持続可能な環境づくり

天野 私たちは「自伐型林業」を行なっています。「森があるけど、自分で手入れは難しいんだ」「昔は自分でやっていたんだけど…」といった地域の山主さんから依頼を受けて、放置されてしまった森に代わりに入っていき、その管理をしています。

市長 「森の管理」というのは、具体的にどんなことをしているんでしょうか？

天野 「長伐期多間伐施業（ちょうばつきたかんばつ）＝長い期間にちょっとずつ木を切る」というやり方で、木を運び出す道づくりをしながら、その森のうちの2割くらいの木を、10年に一度切っていきます。

市長 そういった間伐を、いくつかの森で回しながらすすめているわけですね。

天野 日本の国土の⅔は森林ですが、安い外国産材木が使われるようになったこと、林業業界の高齢化によって、その多くが放置されてしまっています。また、大規模間伐をおこなった場所から土砂崩れなどが起きる事例も増え、林業のあり方が見直されています。こういった状況から、環境に配慮した「自伐型林業」が注目されています。

取材時にも、アウトドアブランド「Patagonia」から、天野さんのライフスタイルを学びに訪れる方々がいた。

森を身近な存在に…仲間づくりにも挑戦

天野 私たちスノーボーダーは、「雪」「山」といった自然の恩恵を大きく受けている存在です。そして私たちは、自然環境の変化を肌で感じてきました。林業を始めるときも、自然を壊すようなやり方をするつもりは全くなかったですね。いま自分たちのやっていることが、その自然を守ることに繋がるのは、大きなやりがいになっています。

市長 自然豊かな小諸市には、手がつけられていない山林があります。森を愛して、森を知る皆さんにその管理を率先して行なってもらえるのは、本当にありがたいです。いまは、乙女湖公園の森の作業にはいってもらっていますね。

天野 乙女湖公園の森は、間伐が必要な状態です。また、間伐された木を運び出す「道」も必要です。ですが、この道ができると、長きにわたって林業家たちが森林を管理できます。市の文化会館・公民館・公園が近くにあるの場所なので、地権者の方と相談しながら、ひとが集まれる空間や子どもたちが楽しめる遊具なんかを作れたらと思っています。

実績を重ね、林業の担い手づくりにも取り組んでいきます。林業の必要性を理解してもらい、様々な補助金なども使って、新たに挑戦・参入しやすい環境もつくっていきたいですね。

天野さんは、薪割り体験・お香づくりなど、森や木々を身近に感じられる取り組みも積極的に開催中。

SHINICHIRO HIDAKA